

結成20周年
新たな大躍進
に向け出発!

動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
99.11.11 (公) 043 (222) 7207 番
No. 5044

東労組組合員は戦争協力を決定した JR総連・革マルと決別しよう!

東労組の
正体を暴く

④

JR総連・革マルの 「時代認識」の反動性

柴田 (JR総連委員長)

公然と戦争協力を宣言!

6月開かれた、JR総連の大会後、柴田は「国会で成立した周辺事態法と改悪自衛隊法によってJRは軍事輸送・戦争参加を拒否できないのである」とあからさまに軍事物資輸送への協力加担を公言している。こうした超反動方針の背景となっているのが革マルによって極めて意識的につくりあげられている「時代認識」である。

「戦時下」では労働運動はもはや存在しないという時代認識が必要。矢継ぎばやの攻撃が自自公によって仕

掛けられている。これへの闘いは、ほとんどない。こうした現実を「戦時下」と呼び、そこでの労働運動を「戦時下の労働運動」と呼称する。・「戦時下」とは労働運動は存在させられない状態をいう

実におぞましい得手勝手な「現状認識」ではないか。彼らは、「戦時下だからこう闘おう」というのではない。まったく逆である。

この間動労千葉をはじめ多くの労働者が現場から団結を固め、戦争協力拒否の闘いに立ち上がり、新たな闘う共同戦線をも創り出す偉大な端緒を切り開いてきた。しかし、JR総連革マルは、ガイドライン反対闘争はおろか九九年の闘いを放棄し、むしろ闘争破壊に奔走してきた。そのむくいと完全に孤立し、今や闘う全ての人々・団体から排除・弾劾されている。

「戦時下」と「冬の時代」
論は同じ意図と構造だ!

革マルは、国鉄分割・民営化攻撃に対し、「冬の時代」「闘ってもだめだ」として、いち早く敵の軍門にくんだり、国鉄闘争破壊の尖兵になり、自らだけ生き延びようという大裏切り・大罪を犯した。これとまったく同様の構造をもって「戦時下」だから闘えない」「立ち上がったも無駄だ」と言い放ち、懸命に努力し、決起している労働者人民に敵対し、抑圧・圧殺しようとしているのが現実である。

軍需生産の推進を唱える

松崎 (JR総連会長)

九五年水戸講演

弾は撃つても原型を残してはダメ。いくらだって消費できる。だから税金でどんどん作ればいい。理想で食って生きていくわけにはいかない。だったら軍需生産でもなんでもやろう。

国鉄決戦にしても、戦争反対の闘いにしても、これからが正念場という時に、労働組合の名をもって労働者を「武装解除

し、戦争に動員しようとする。それがJR総連革マルの偽らざる正体である。

都労連の闘いに敵対する
革マルに怒りの弾劾

都労連は、石原の賃下げ攻撃に対し、徹底的交戦に立ち上がった。都労連は「訴え」の中で「効率が悪い者は切り捨てるような社会のあり方を問う闘いだ。闘いは負けても勝つてもいい。われわれは闘いぬく。明日の社会のあり方に一石を投じることができれば幸いだ」と。実に今日の労働運動の危機突破に向かった力強い胎動が始まった。「十一・七労働者集会」の大成と響きあつて、新たな潮流の形成へと大きく動き出している。正にこの時に革マルは、立ち上がる都労連の仲間に対し、暴力的に敵対し逆に粉砕され、断崖の嵐の中で更に自らを窮地に追いやっていく。

全ての闘う労働者に包囲されたJR総連革マル解体一掃へ。最悪の卑劣漢・JR総連革マルの常套手段は、国鉄労働者の多くがよく知っているようにデマ、暴力、窃盗、盗聴、買収等々である。そこには一変の正義も大義も無い。JR総連・東労組の組合員は今こそJR総連革マルと決別しよう。